

# 森里海に学ぶ

## 大正大と三陸の連帯

- 10 -



C・W・ニコルさん

### ●手造りの石垣

今年1月、エチオピア政府の招きで同国を訪れ、大変な歓迎を受けた。45年ぶりの再訪だ。1971年、私は英米で『アフリカの屋根か

な森林破壊による土壌の喪失と干ばつが主な原因だった。

今回、視察の旅で印象に残ったのは、何千キロも連なる高さ1メートルほどの石垣だ。雨期に農地の土壌流出を防ぐ土留めだが、村人たちの手で積み上る。

### 作家 C・W・ニコル

### ●「環境を破壊」

翻って、東北地方の「巨大

日本の沿岸漁業が栄えていたのは、酸素をたっぷり含んだ流れの速い河川が何万と海へ注いでいるおかげ、そして山から染み出すミネラル豊富な地下水のおかげだ。だが、巨大な防潮堤は、海へ向かう地下水の流れをせき止め、行く手を阻まれた水は陸地側の地下に貯留する。将来、再び地震が起これば、そのせいで防潮堤や周辺の構造物は沈下し、甚大な被害をもたらさざらう。すでに日本各地で同様の被害が発生している。

「日本は何でこちからは、「日本は何でこちからは、」という電を子メールが届く。英国海軍の軍人だった父はよく言っていた、「世界に七つの海などありはしない、海はひとつ、すべてつながっているのだ」と。だからこそ、世界中の人々が事の成り行きに心を痛めている。

東北の人々は、東日本震災と福島第一原発の失態で深く傷つき、今も苦しい生活を強いられている。このうえ、巨大防潮堤で追い打ちをかけるのか。もっといい方法がないかもあるというのに。

エチオピアは日本よりはるかに貧しく、技術的には遅れているが、指導者たちの知恵、人々が祖国の未来に対して抱く誇りと信頼は何倍も豊かだ。今回の旅で、誰のため、何のための「公共事業」かをあらためて考えさせられた。

(訳/森 洋子)

# 巨大防潮堤建設に疑問

ら』(FROM THE ROOF OF AFRICA)という本を出版した。エチオピア北西部に位置するシミン山塊、別名「アフリカの屋根」に同国初の国立公園を建設した当時の、初代公園長としての苦勞をつづった作品だ。本の中で私は内戦の勃発と大飢饉(ききん)の到来を予言し、それは的中した。大規模

「な防潮堤」はどうか? 地元漁民、環境保護やエコツーリズムの関係者など誰もが反対する中、莫大(ばくだい)な建設費を投じて建設が進められている。場所によっては高さ14・5メートル、幅90メートルに及ぶ巨大な壁は、環境を守るどころか、沿岸漁業や観光資源、生物多様性、住民の暮らしを破壊するだけの代物だ。

●聞く耳持たず  
しかし、政府は、地域住民の抗議にも、専門家の意見にも聞く耳を持たない。単なる傲岸(ごうがん)「ごうがん」無知では済まされない、この国の未来に対する犯罪だ。今は世界のどこにいても日本の衛星画像を見ることが出来る。漁業や環境保護に携わる海外の友人たちから

大正大(東京)と河北新報社の連携事業として、同大が宮城県南三陸町などで行う出前講座、フィールド学習の内容を担当の講師に月1回報告してもらいます。